慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 唐詩における口語表現 : 動詞に後置する助辞をめぐって |
| Sub Title | Colloquialism of poems in Tang dynasty : About suffixes put after verbs |
| Author | 詹, 満江(Zhān, Mǎn-Jiāng) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1987 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.51, (1987. 7) ,p.90- 110 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00510001-0090 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 唐詩における口語表現

## ――動詞に後置する助辞をめぐって――

詹　満　江

口語と文言との相違が大きい中国にあっては、時間的に溯って、ある時期に話しことばがどのようであったのか、残されている文献から探る場合、非常に困難な作業になる。それでも、『世説新語』『遊仙窟』敦煌変文や訳経などの文献を資料として、中古における口語のありさまは少しずつ明らかにされつつある。

唐詩も、そのころの口語を知る資料として、決して充分なものとはいえないまでも、重要である。しかしながら、詩は読書人たる士大夫の文藝であるので、〝雅〟を重んじる傾向は否めず、それだけ口語の入りこむ余地は少ないことも確かである。それでは、唐詩の中にいったいどれだけ口語が使われているのであろう。また、詩人によって、どのような量的、質的な差異があるのであろう。

そのような興味から、小稿においては、口語の語彙的なものは後考に俟つとして、語法の面から、口語としてよく使われると見受けられる動詞に後置する助辞「得」「取」「却」「与」「着(著)」に絞って、鄙見を述べてみたい。

なお、筆者が述べる文法的説明の多くは、参考文献に挙げた諸著に拠るが、それぞれいずれの論著にみえるかは、煩を厭うて注記していない。

（一）

これら五つの助辞について、唐詩における表われ方を知る一法として、索引の備わっている詩人について調べてみた。次頁の表はその結果である。

各詩人の作品数は、それぞれの索引に、その数が明記してある場合はそれに拠る。それ以外は平岡武夫編「唐代のしおり」11・12『唐代の詩篇』一・二に拠っている。

「件数」とは、五種の助辞の詩に表われた数である。

その内訳として、「古詩」「楽府歌行」「絶句」「律詩」の四種に分け、それぞれの詩体における五種の助辞の表われた数を示している。「古詩」には騒体を含み、「楽府歌行」には、雑言、詞を含み、「律詩」には、五言排律（七言排律）を含むことはもちろん、三韻律詩も含めた。

李白は、件数に対して、内訳の総計が一件足らないが、それは索引によって、一つ逸句に表われているのを件数に含めているためである。

白居易は『全唐詩』に拠って筆者が調べた。

調査してみて、まずはっきりしたことは、初唐の詩人に、この五種の助辞を用いる口語表現がまず見られないことで

| | 作品数 | 件数 | 古詩 | 楽府歌行 | 絶句 | 律詩 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 杜審言 | 43 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 王勃 | 97 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 陳子昂 | 128 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 孟浩然 | 263 | 5 | 0 | 0 | 2 | 3 |
| 王昌齢 | 223 | 6 | 0 | 4 | 1 | 1 |
| 王維 | 384 | 5 | 1 | 2 | 1 | 1 |
| 李白 | 1,049 | 37 | 12 | 19 | 3 | 2 |
| 杜甫 | 1,455 | 43 | 4 | 12 | 3 | 24 |
| 岑参 | 401 | 21 | 7 | 5 | 3 | 6 |
| 錢起 | 532 | 5 | 1 | 0 | 2 | 2 |
| 韋応物 | 571 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 孟郊 | 502 | 24 | 12 | 4 | 3 | 5 |
| 韓愈 | 418 | 16 | 9 | 1 | 4 | 2 |
| 張籍 | 487 | 42 | 0 | 12 | 9 | 21 |
| 白居易 | 2,865 | 265 | 28 | 39 | 67 | 131 |
| 柳宗元 | 181 | 4 | 1 | 0 | 3 | 0 |
| 李賀 | 243 | 15 | 2 | 7 | 5 | 1 |
| 杜牧 | 524 | 35 | 0 | 2 | 15 | 18 |
| 温庭筠 | 338 | 21 | 0 | 7 | 3 | 11 |
| 李商隠 | 609 | 40 | 7 | 4 | 16 | 13 |

ある。他の口語表現はあるいは用いられているのかもしれないし、他の初唐の詩人はその限りではないかもしれない。しかし、太宗の詩にも、この五種の助辞は表われないし、初唐の詩の傾向として、口語表現は少ないだろうと考えられる。杜審言に見える一件にしても、充分に口語的といえるものではない。その詩は「張侍御に代わって美人を傷む」と題する五言律詩で、その尾聯に次のように見える。

応憐脂粉気　留著舞衣中　（亡き彼女の化粧の香りが、舞いのための衣裳に残って着いているにつけても可哀相に思わずにはいられない。）

この場合の「留著」の「著」は、助辞（助動詞）として持続を表わしているというよりも、もとの動詞としての「つく」という原義の色合いが濃厚である。もちろん、持続を表わす助辞だと考えても、不都合はないけれども、少なくとも複合動詞から動詞＋助辞（助動詞）への過渡的な色彩が強いことは否定できない。例えば、陳の江総の「烏棲曲」に、

城南美人啼著曙　（城南の美人は夜明けまで啼いていた。）

とあるのに比べれば、杜審言の詩の「著」のほうが複合動詞としての色合いが強いことが感じられよう。六朝の詩人に見出される口語が、初唐の詩人により少ないようであるというのは、時代が逆行しているかのようである。しかし、六朝の詩人たちは、貴族階段が多く、また南方が活躍の舞台であり、遊戯的な詩作を生む環境にあったのに対し、初唐の詩人たちは、貴族階級出身者は少なく、北方の人が多く、その詩風も遊戯的というよりは清新で、活発な方向にむかっていて、それだけ緊張した表現となり、口語が表われにくかったのかもしれない。

盛唐になると、そろそろ口語が表われはじめる。李白と杜甫は、その詩風において盛唐を代表するばかりでなく、口語の使用度においても群を抜いている。李白は、その飄逸な詩風を反映して、やはり古詩、楽府歌行に口語表現が多く表われている。杜甫は、律詩にすぐれることを反映して、口語も律詩に最も多く表われる。楽府歌行に口語が表われやすいことは、その詩体の性格から理解しやすいが、古詩においては、文言が中心となるだろうと予想される。杜甫において古詩に口語表現が少ないのは頷ける。しかし、絶句により少ないのは意外な感じがした。絶句が当時よく歌唱されたことは、様々な資料から知ることができる。例えば、唐の薛用弱の『集異記』に見える話は有名である。王昌齢、高適、王之渙の三詩人が、歌妓に唱われる詩の数を競う話で、唱われた詩は、高適のを除いて、みな絶句であった。しかし、杜甫は、絶句において、あるいはその詩全体を通じて、当時の表舞台とは異なったところに位置していたことを感じさせる。岑参は、その作品数からみて、口語が多い方といえよう。杜確の「岑嘉州詩集序」に一般庶民や夷狄にまで〝諷誦吟習〟されたとみえるのも頷ける。

中唐に至って、口語の表われ方に変化がみられる。量的な面においては、初唐から盛唐、そして中唐へと、全体として増加の一途をたどっている。しかし、質的にみれば、各詩人の個性の相違によってはっきりと傾向が分れるのである。韋応物に一件もないというのは極端なことであるが、白居易の多さも顕著である。白居易の作品数の多さを考慮しても、詩人がとりわけ多く口語を詩に使っていることは明らかであるといえよう。平易な詩を作るように心がけた白居易の姿勢が、口語の頻用によって裏付けられる。張籍も口語を多く使っている。詩体別にその件数が、「律詩」に最も多く、古詩にないという状況は、白居易の詩体別の分布と相似る。詩体の性格の違いから考えて、充分自然な分布に思われる。張籍は韓愈の弟子といわれるが、その作詩傾向は白居易の方に近いと思われる。この白居易、張籍と対極にあ

ると思われる詩人が、韓愈、孟郊である。この二人の詩人は、古詩に最も多く口語を使っている。それは、古詩の作品が多いせいもあろうが、その古詩の詩風が、以前の詩人たちのそれと違っているであろうことを想像させる。李白も古詩に口語を多く使うけれども、李白の奔放さとは違った性格の表われと思われる。韓愈は古文運動をすすめているが、それは決して普通の意味での〝復古〟ではない。復古を唱えて、実は新しい文学を創造している。そんな姿勢が数値に出ているように感じられる。孟郊も相似るように思われる。韋応物と柳宗元は他の中唐の詩人と著しく掛け離れた数値を示している。韋応物は陶淵明の流れを汲むといわれるが、古詩を得意とし、枯淡な趣きをもつ詩風からして、口語がその詩に表われにくかろうと思う。柳宗元も、その自然描写の詩には孤絶した寂寥感があり、人と相対して始めて生じる会話、それが口語表現の潜在的な形であるとすれば、柳宗元の詩には会話は少ない。内面に向かう詩の方が多い。やはり口語表現は少なくなって当然である。李賀は、楽府が多い詩人にしては口語表現が少ないといえよう。

晩唐には詩に口語を用いることが定着したようである。杜牧は、古体と近体とで、明らかに作風がちがう詩人だが、口語の表われ方も、そのことを裏付ける。古体においては硬骨さを、近体、とくに絶句においては洒脱さを発揮する特質を反映した数値となっている。温庭筠には意外に口語が少ない。古詩にないのは、杜牧と事情がちがい、もともとこの詩人に古詩が少ないためであろう。李商隠は、とりわけ近体にすぐれる詩人ゆえ、近体に件数が多くなる。古詩にも口語をよく使うのは、杜牧とちがって、詩体にかかわらず綺艶な詩が多いせいのようである。

以上、ひととおり調査の結果について考えたところを述べた。扱う口語や詩人が限られているので、決して充分な資料とはいえないが、それでも、いささかなりとも、それぞれの時期、それぞれの詩人の特徴を反映していると思う。

## (二)

動詞に後置する五種の助辞のそれぞれについて、具体例を挙げつつ検討しよう。

### 「得」

この字は本来、〝獲得する〟ことを意味する動詞で、文言においては、目的語を後にとるのが普通である。

求則得之、舍則失之。(求めればそれを得ることができ、捨てておけばそれを喪失する。)『孟子』告子上

不入虎穴、不得虎子。(虎穴に入らずんば、虎子を得ず。)『後漢書』班超伝

〝獲得する〟という本義が引伸して、〝〜できる〟と可能を表わすと、後に動詞をとって補動詞となる。

君子之至於斯也、吾未嘗不得見也。(ここにおいでになった君子に、私はまだお会いできなかったことはありません。)『論語』八佾

王政可得聞与。(王者の政治について、聞かせてもらえるだろうか。)『孟子』梁恵王下

文言においては、自立語である動詞としても、付属語である補動詞としても、他の動詞の後になることはない。「取得」「捕得」のように他の動詞のあとにつく場合は、前の動詞と等立の関係にある。

口語においては、動詞の後につき、可能を表わす他、結果補語を導いたり、ほとんど意味をもたなくなったりする。〝獲得する〟という原義が残っているように思われる例を挙げる。

少年猟得平原兎　馬後横捎意気帰

（若者は平原の兎を捕らえて、馬の尻をよこざまに打ち、意気揚々と帰る。）　王昌齢「観猟」七絶

貰得新豊酒　復聞秦女箏

（新豊酒を掛け買いし、また秦女の箏を聞く。）　王維「与盧象集朱家」五律

趙有豫譲楚屈平　売身買得千年名

（戦国、趙には豫譲がおり、楚には屈原がいて、その身を売って千年も伝わる名声を買えた。）　李白「笑歌行」

唯向天竺山　取得両片石

（ただ天竺山で、二つの石を手に入れただけだ。）　白居易「三年為刺史二首」第二首　三韻律詩

「猟得」は、狩りをして得たという意味で、とりわけ複合動詞の色が濃いが、「得」に可能の意味を感じさせなくもない。狩猟には能力の上手下手があるゆえ、若者は狩りがうまくできて、兎を手に入れられる、と考えると、意気揚々と帰る得意気な様子を詠む後の句ともよく呼応するように思われる。しかし、「得」の原義は表われている。

「貰得」「買得」「取得」は、「得」の上の動詞がみな獲得することにかかわるものゆえ、複合動詞なのか、動詞＋助動詞なのか、判然と区別しにくい。得の原義を色濃く残しながらも、得の意義は軽くなっているように感じる。過渡的な例といえよう。

次に明らかに助動詞化して可能を表わしている例を挙げる。

数茎白髪那抛得　百罰深杯亦不辞

（数本の白髪はどうして抜き棄てられよう。この悲しみを紛らすためなら、深い杯で百回の罰杯を飲まされても辞さないつもりだ。）　杜甫「楽遊園歌」

莫辞数数醉東楼　除醉無因破得愁

（しばしば東楼で飲んで酔おうと誘うけれども断わらないでくれたまえ。酔う以外に愁いを打ち破ることのできるすべがないのだから。）白居易「東楼招客夜飲」七絶

誰人断得人間事　少夭堪傷老又悲

（だれが人間の幸不幸を決めることができよう。若死にも充分傷ましいが、年とることもまた悲しいことだ。）

白居易「夭老」七絶

三例のうち二例は、反語であるが、やはり、強調した表現の中でないと、明らかに可能としての「得」だと認定できないことが多いのである。

次は動詞＋不得（未得）の例である。

明眸皓歯今何在　血汚遊魂帰不得

（明るいひとみと白い歯の美しかった楊貴妃は今どこにおられるのか。血に汚れ、さまよう魂は、どこへも帰ることができないのだ。）杜甫「哀江頭」楽府

君家赤驃画不得　一団旋風桃花色

（君のあかかげの馬は、絵にも描けない。旋風がさっと巻き上げる桃の花のような色の毛並だ。）岑参「衛節度赤驃馬歌」

迷魂乱眼看不得　照耀万樹繁如堆

（心を迷わされ、眼を眩まされて、じっと見ていられない。李の花はたくさんの樹に照りかがやいて、その多さは小さな丘のよう。）韓愈「李花贈張十一署」七古

湘東行人長嘆息　十年離家帰未得

（湘東の旅人は長いため息をつく。十年も故郷のわが家を離れて、まだ帰れない。）　張籍「行路難」

千薬万方治不得　唯応閉目学頭陀

（どんな薬でもどんな方法でも、この眼は治すことができない。ただ目を閉じて頭陀の法を学ぶしかない。）白居易「眼暗」七律

否定の場合、ほとんど不可能を表わしているとみてよいだろう。文言においては、不得＋動詞で禁止を表わすことがあるが、「不得」が動詞の後になる口語表現で、禁止を表わす例は、今回、探しえなかった。また、白居易の「長恨歌」に「御宇多年求不得」とあるのは、「得」を機能語とみるべきか、動詞とみるべきか、判断が難しい。意味からみれば、〝求める行為ができない〟のではなく、〝求めても手に入らない〟のであるから、動詞ということになろう。しかし、それでも探しあてることができないというニュアンスとして、不可能の意味がこめられているように感じるのである。

「得」の後に結果補語がある例を挙げる。

已応春得細　頗覚寄来遅

（黄粱はもう細かく春いたことだろうに、届けに来るのがいささか遅いように感じる。）　杜甫「佐還山後寄三首」第二首　五律

駆禽養得熟　和葉摘来新

（鳥を追い払って、桜桃の実が熟すまで栽培し、葉といっしょに摘んで来たばかりだ。）白居易「与沈楊二舎人閣老同食勅賜桜桃、玩物感恩、因成十四韻」五古

両地江山蹋得徧　五年風月詠将残

（蘇州杭州どちらの山も川も、あまねく歩きまわった。五年の間、風や月を詩に詠じてきたが、もうほとんど詠

じ尽くそうとしている。）白居易「詠懐」七律

文言において、結果補語をもつ「得」の表現はない。非常に口語らしい表現といえる。この場合、「得」には機能語としての役割りしかない。

さらに、実質の意味を表わさなくなった例を挙げる。

記得長安還欲笑　不知何処是西天

（長安を覚えていて、ふりかえって笑おうとしたが、どちらが西の空やらわからない。）李白「陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舎人至遊洞庭五首」第三首　七絶

恰似春風相欺得　夜来吹折数枝花

（まるで春風がばかにしたかのように、夜のうちに何本かの花の枝を吹き折っていた。）杜甫「絶句漫興九首」第二首

春風触処到　憶得故園時

（春風にあたるところへやって来て、故郷の園をおもうとき。）岑参「江上春嘆」五律

当年嫁得君　為君秉機杼

（今年あなたのところへ嫁いできて、あなたのために、はたの杼をとり機織りするのです。）孟郊「織婦辞」楽府

到時想得君拈得　枕上開看眼暫明

（この薬がそちらに着いたとき、君が手に取ることを思う。病床の枕辺で開き見て、そのひとときだけでも眼の前が明るくなってくれれば。）白居易「聞微之江陵臥病、以大通中散碧腴垂雲膏寄之、因題四韻」七古

頭玉磽磽眉刷翠　杜郎生得真男子

（頭は骨っぽく剛健で、眉はみどりでさっと引いたようにりりしい。杜くんは真の男子に生まれついた。）李賀「唐児歌」

「記得」「憶得」「想得」など、心理的な動詞は、「得」に何の意味もないことが多い。同じ心理的な動詞でも、「認得」「料得」など、認知を表わす場合は、動詞の性質そのものに可能の要素が強くあるゆえ、「得」が可能の意味を担うことが多い。

次の例は「能」を伴ったもの。

誰能拋得人間事　来共騰騰過此生

（だれがこの人の世を捨てられよう。いっしょに元気よく生きていこう。）白居易「答元八郎中楊十二博士」七律

誰能截得曹剛手　挿向重蓮衣袖中

（だれが曹剛の手を切って、重蓮の袖の中に挿すことができよう。）白居易「聴曹剛琵琶兼示重蓮」七絶

未能拋得杭州去　一半勾留是此湖

（杭州の地を捨てて去ってしまうことができないでいるのは、半分はこの西湖にひきとめられているからだ。）白居易「春題湖上」七律

誰能料得今春事　又向劉家飲酒来

（だれが今年の春のこのありさまを予想できただろう。また劉夢得さんの家に酒を飲みに来るなどと。）白居易「会昌元年春五絶句　病後喜過劉家」

以上四例みな白居易の詩である。今回、この四例の他は見出さなかった。そのうちの三例は反語であるし、強調の表現

である。可能の意味は「能」に多く担われているようであるが、「得」もそれと呼応して、可能が強調されるものと思われる。

「得」についての例はひじょうに多い。それだけに、その使用度によって、各詩人の口語の多寡を測る指標となりうるのである。

## (三)

「取」「却」「与」「著(着)」は、「得」とちがって、そのもとは使成複合動詞である。それゆえ、「得」のように語序はもともと問題にならない。

### 「取」

複合動詞としての色合いが強い例を挙げる。

摘取芙蓉花　莫摘芙蓉葉
(蓮の花を摘みとりなさい。蓮の葉を摘んではいけない。)　王昌齢「越女」楽府

折取対明鏡　宛将衰鬢同
(折りとって鏡に向かうと、〝白頭翁〟の葉は、さながら私の白髪と同じみたいだ。)　李白「見野草中有名曰白頭翁者」五律

焉得并州快剪刀　剪取呉松半江水

（なんとかして、并州のよく切れる刀を手に入れて、松江の水の半分でも切り取って絵にできればいいのに。）杜甫「戯題画山水図歌」

秋来野火焼櫟林　枝柯已枯堪採取

（秋になって、野火が櫟の林を焼いてしまったので、枝はもう枯れてしまって、採ることができるようになった。）張籍「樵客吟」楽府

他に、「奪取」「収取」など、いずれも複合動詞としてとらえることができる。「得」と同様、意味としては獲得を表わすことも多いが、成り立ちは使成複合動詞として始まっているので、語序は常に他の動詞の後になる。

次に「取」が助動詞化した例を挙げる。

看取富貴眼前者　何用悠悠身後名

（目の前の富貴だけ見なさい。はるか先の死んでから後の名声など何になるというのですか。）李白「少年行」

試妾与君涙　両処滴池水

看取芙蓉花　今年為誰死

（こころみに私とあなたの涙を二ケ所の池にそれぞれ滴らしてみましょう。蓮の花をごらんになって。今年、だれのせいで枯れてしまうかしら。）孟郊「古怨」楽府

老人言　君聴取（このおじいさんの言葉を、諸君とくと聞きたまえ。）白居易「新豊折臂翁」楽府

元和粧梳君記取　髻椎面赭非華風

（今日、元和の化粧や髪型はといえば、諸君しっかり覚えておきたまえ。とがったまげや赤い顔は、中国の装いではないのだということを。）白居易「時世粧」楽府

唯君莫惜醉　認取少年場

（君だけは酔うまいとして、けちけち飲まないでくれ。血気盛んな若者が集まって騒ぐよさをわかってほしい。）
杜牧「早春贈軍事薛判官」五律

知覚を表わす動詞や、心理的な動詞のあとに「取」がつくと、願望、要求、命令の表現になることが多い。「取」のもとの意味が、自分から働きかけて何かを取るという積極的な行動を表わしているせいであろうか。しかし、「取」の動詞としての意味はなくなっていると考えられる。

「取」の後が使役になる例を挙げる。

不然笳按鼓戲滄流　呼取江南女児歌棹謳
（さもなければ、葦笛を鳴らし、太鼓を打って、川の流れに戯れ、江南の少女を呼んで、ふなうたを歌わせよう。）
李白「江夏贈韋南陵冰」雑言

誰能載酒開金盞　喚取佳人舞繡筵
（だれが酒を運び金の杯を出し、佳人を呼んでぬいとりしたしきものに舞いをまわすことができよう。）杜甫「江畔独歩尋花七絶句」第四首

願将花贈天台女　留取劉郎到夜帰
（咲き誇っている花を天台の山のかの二人の娘に贈りたいものだ。そうすれば、彼女たちが劉晨と阮肇をとどまらせたのにあやかって、劉君をひきとめ、夜になってから帰らせられよう。）白居易「県南花下酔中留劉五」七絶

いずれも人に働きかける動詞、呼ぶ、喚ぶ、留める、なので、使役の形を導きやすいといえるであろう。「取」は実質の意味はなく、他に対して積極的に働きかけるニュアンスを残していて、使役を導く機能を担っていると思われる。

「却」

宋以後は「了」のほうが多く使われるようになったといわれる。完了を表わすといわれるが、「去」に近い意味のことが多い。

丈夫何事空嘯傲　不如燒却頭上巾

（一人前の男がどうしてむなしくうそぶきおごっているのだ。頭巾など焼いてしまったほうがいい。）李白「酔後贈従甥高鎮」七古

此処吟詩向山寺　知君忘却曲江春

（ここで詩を吟じて山寺を見ていると、君が曲江池で進士及第を祝った春を忘れてしまったことがわかるのである。）張籍「寄蘇州白二十二使君」七律

売却新昌宅　聊充送老資

（新昌の家を売り払って、しばらく老後の資金に充てよう。）白居易「詔授同州刺史、病不赴任、因詠所懐」五排

漢帝不憶李将軍　楚王放却屈大夫

（漢の皇帝は李広将軍を大事に思わなかったし、楚の懐王は屈原を追放してしまった。）李白「悲歌行」

一片花飛減却春　風飄万点正愁人

（ひとひら花びらが飛んでも、それだけ春が減ってしまうというのに、風が万もの花びらをひるがえしては、ほんとうに愁えてしまう。）杜甫「曲江二首」第一首　七律

男児何必恋妻子　莫向江村老却人

（男は妻を恋いおもうばかりが能じゃない。田舎で老いさらばえないでくれたまえ。）岑参「送費子帰武昌」七古

どの例も完了といえばいえるが、前にくる動詞に共通した点がある。焼、忘、売、放、減、老、みな消滅、喪失の概念

でとらえることのできる性質の動詞である。その場から無くなってしまう、という方向のものである。それゆえ、その方向を時間的なものにあてはめれば、完了するということになるように思われる。

最悲昨日同遊処　看却春風樹樹新

（一番悲しいのは、つい昨日いっしょに遊んだところ。春の風情をすっかり見おわって、樹々が新緑におおわれてしまっていることだ。）張籍「哭丘長史」七律

この「看却」の「却」は完了と考えられよう。

「与」

主として授与動詞のあとにつく。介詞としても用いられるが、助動詞として動詞のあとに用いるのは、古代語の用法にはない。助動詞としての使い方は口語的といえる。現代語の「給」に相当するといわれる。

嫁与長干人　沙頭候風色

（長干の人に嫁いで、水辺で風の色をみる。）李白「長干行二首」第二首

聖賢古法則　付与後世伝

（聖人賢人は、雁や羔が礼を知っていることにあやかって、古の礼法を定め、後世に授けて、伝えたのである。）杜甫「杜鵑」五古

禄米嘗不足　俸銭供与人

（扶持米は足りたためしとてないのに、給金を人にあたえてしまう。）岑参「題新郷王釜庁壁」五律

蔵書挂屋脊　不借与凡聾
（蔵書は棟梁にとどくほどあるけれども、凡愚なやからに貸しはしない。）孟郊「勧善吟」楽府
蹇驢放飽騎将出　秋巻装成寄与誰
（びっこのロバは充分に放しておいたからもう騎って出かけるとしよう。秋に作った詩文は巻物にして装丁もできあがったが、だれに贈ろうか。）張籍「贈賈島」七律
欲将此意憑廻櫂　報与西湖風月知
（この気持ちを揺れ動くかいにこめて、西湖の風月に伝えて知らせたい。）白居易「杭州廻舫」七絶

「着（著）」

元来「くっつく」「身につける」意味の動詞であるから、「附着」「愛着」などと、ものでも心でも「くっつく」ことに拘わる複合動詞となる。それが助動詞化すると持続、定着を表わすことになる。

以下、持続を表わしているとわかる例。

想得家中夜深坐　還応説著遠行人
（家ではみんな夜おそく眠らずにすわって、やはり遠く旅している私のことを話しているだろうと思う。）白居易「邯鄲冬至夜思家」七絶
何年飲著声聴酒　直到如今醉未醒
（いつの年から涅槃に入る声聞の酒を飲んでおられるのですか。ずっと今まで酔ったまま醒めないとは。）白居易「戲礼経老僧」七絶
踏着不死機　欲帰多浮嫌

（滝は不死の機を踏みつづけ、帰ろうとしても、とかく浮薄な俗塵にまみれるかと思うと、帰るのがいやになる。）
孟郊「噴玉布」五古

何事古今詩句裏　不多説著洛陽秋
（なぜか、古今の詩句の中で、洛陽の秋について言っているものはあまりない。）白居易「秋遊」七絶

看著白蘋牙欲吐　雪舟相訪勝閑行
（水草の白い花が芽吹いて雪のように咲いてくるのを見ながら、かの王子猷が雪の夜、舟で戴安道を訪ねたのにならえば、ひとりで散策するよりよいと思いませんか。）杜牧「湖南正初招李郢秀才」七律

定着を表わしていると思われる例も挙げよう。

細看只似陽台女　酔著莫許帰巫山
（よく見るとどうみても陽台の仙女のようだ。酔っぱらわしてしまって巫山に帰らすまいぞ。）岑参「酔戯竇子美人」七絶

幾度野火来　風迴燒不著
（いく度野火がせまって来ても、風が吹きかえして、焼けなかった。）白居易「有木詩八首并序」第四首　五古

今回、動詞＋不著の形は、白居易のこの一例のみ見出した。ひじょうに口語らしい表現である。

唐詩に表われた口語表現について、限られた範囲ではあるが、考察してきた。ときに、現代語と変わらないほど、口語らしい表現がみられたと思う。ことに、中晩唐における口語表現の使われ方は、質量ともに広がりを持ちつつあったことがわかった。そして、わけても、白居易の口語表現は、量的に他を圧しているばかりでなく、質的にも、群を抜い

て多様に使われていることが明らかにできたと思う。また、中晩唐で、それだけ詩に口語表現が使われるようになった根本には、盛唐、とくに杜甫による近体詩の確立があったと思う。近体詩のリズムに口語をのせることで、詩作はいよいよ活発に展開していったものと考えられる。

中古における口語的な語法については、まだよくわからない点が多い。小稿においても、思い違いや気付かずにいることがあろうかと思う。博雅の叱正をお願いする次第である。


【参考文献】

杜審言詩一字索引　森瀬寿三序　藤沢隆浩　一九八五

王勃詩一字索引　塩見邦彦　一九八五

陳子昂詩索引(附　陳子昂詩集)　安東俊六　一九七六

孟浩然詩索引　中国学術考究会　一九八一

王昌齢詩索引　芳村弘道　一九八三

王維詩索引　都留春雄他　一九七〇

李白歌詩索引(唐代研究のしおり八)　花房英樹　一九五七

杜詩引得　哈仏燕京学社　一九四〇

岑参歌詩索引　新免恵子　一九七八

銭起詩索引　田部井文雄　一九八六

韋応物詩注引得　湯姆斯　一九七六

孟郊詩索引(東洋学文献センター叢刊別輯九)上・下　野口一雄　一九八四

韓愈歌詩索引　花房英樹　一九六四

張籍歌詩索引　丸山茂　一九七六

柳宗元歌詩索引　前川幸雄　一九八〇
李賀詩引得　艾文博　一九六九
杜牧詩索引　山内春夫　一九七二
温庭筠歌詩索引　岩間啓一　一九七七
李商隠詩索引　早稲田大学中国文学会李商隠詩索引編集班　一九八一
唐詩研究　豊田穣　一九四八
中世中国語における得の特質について　内田道夫　東北大学文学部研究年報二　一九五〇
中国語歴史文法　太田辰夫　一九五八
唐詩概説（中国詩人選集別巻）　小川環樹　一九五八
漢語史稿（中冊）　王力　一九五八
漢語詩律学　王力　一九五八
漢語文法論—中古篇—　牛島徳次　一九七一
唐詩俗語新考　塩見邦彦　立命館文学四三〇～二　一九八一
白居易詩における俗語表現　塩見邦彦　文化紀要一六　一九八二
唐詩俗語新考二・三　塩見邦彦　文化紀要一七・一八　一九八三
唐詩俗語新考四　塩見邦彦　文化紀要一九　一九八四
中国中世語法史研究　志村良治　一九八四
敦煌変文に於けるV得について　玄幸子　中国語学二三二　一九八五
唐詩俗語新考補遺　塩見邦彦　文化紀要二二　一九八五
敦煌変文に於ける〝V取〟について　玄幸子　中国語学二三三　一九八六